

小説と映画の世紀展

追悼・菅野昭正名誉館長

2024年9月21日（土）～10月20日（日）／世田谷文学館

フランス文学者・文芸評論家の菅野昭正（1930-2023）が2021年に上梓した評論『小説と映画の世紀』をもとに、展示と上映会、トークイベント等で「小説」と「映画」の関係について考えてみる展覧会です。

十九世紀の終わりに誕生し二十世紀に大いに発展をとげた映画は、1930年生まれの菅野の世代にとっては共に育ち、その黄金期を経験した身近な存在でもありました。菅野が長いあいだ胸の奥に抱き続けていた、言語と映像を表現媒体とする二つの芸術ジャンル「小説」と「映画」の関係性について考察を試みたとき、それは自身の生きた激動の20世紀という時代を映し出す12篇の作品を選びとることから始まりました。20世紀に書かれた小説と、同じ世紀に映像化された映画。そこには時代に翻弄される人物や状況がゆるやかな時系列に並べられています。

ここに、菅野の目を通して繰りひろげられる「二十世紀」はトーマス・マン『ヴェネツィアに死す』、フランツ・カフカ『審判』にはじまり、ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』、ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』で幕を閉じます。本展では小説と映画の織りなす「二十世紀」に思いを馳せ、過去だけでなく未来にも向けられた菅野の眼差しを追います。

ここには、二十世紀という時代が後世のために綴った遺言が読みとれるはずなのである。

『小説と映画の世紀』（未来社 2021年）

- 会場： 世田谷文学館 1階文学サロン／入場無料
休館日： 毎週月曜日 ※月曜祝日の場合は開館、翌日休館
開館時間： 10：00～18：00 ※ミュージアムショップは17：30まで
主催： 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館
後援： 世田谷区、世田谷区教育委員会
協力： 未来社
上映協力： 下高井戸シネマ

【問合せ】 世田谷文学館 学芸部

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 1-10-10

TEL. 03-5374-9111 / FAX. 03-5374-9120 / www.setabun.or.jp

◆◆◆ 関連イベント ◆◆◆

◎ 豪華ゲストによる対談などのトークイベントを予定。

映画や文学、菅野昭正先生のことなどについて大いに語っていただきます。

◆ 記念対談「菅野昭正先生の思い出」

野崎 歓（フランス文学者・翻訳家・評論家）× 塚本 昌則（フランス文学者、翻訳家）

9月28日（土）14:00～15:30（無料／当日先着50名） 世田谷文学館1階文学サロン

◆ トーク出演『ベニスに死す』

平野 啓一郎（小説家）

10月12日（土）13:30～14:30（無料／事前申込制50名） 世田谷文学館1階文学サロン

◆ トーク出演『時計じかけのオレンジ』

島田 雅彦（小説家）

10月12日（土）13:30～14:30（無料／事前申込制50名） 世田谷文学館1階文学サロン

◆◆◆ 映画上映 ◆◆◆

◎ 世田谷文学館 文学サロン、または講義室で映画を上映します。入場無料

◆ 『第三の男』 キャロル・リード監督（1949年製作／100分／G／イギリス）ほか

「下高井戸シネマ」とのコラボ企画！

◎ 会期中、本展で取り上げる映画から数作品を「下高井戸シネマ」で上映します。有料
京王線・下高井戸駅から徒歩2分のところにある映画館です。

映画スクリーンでじっくりと作品をお楽しみください。

◆◆◆ ラジオ番組出演 ◆◆◆

FM世田谷（FM83.4MHz）「ほんんとわラジオ」にて、本展にからめてお話いただきます

毎週木曜 11:00～11:30 放送

◎ 野崎 歓（フランス文学者・翻訳家・評論家）

放送：① 9月5日、② 19日（再放送 ① 9月12日、② 26日）

◆◆◆ 12 の小説と映画 ◆◆◆

第一章 美神の魔に憑かれて

トーマス・マン『ヴェネツィアに死す』1912年
／ ルキノ・ヴィスコンティ監督『ベニスに死す』1971年

第二章 知られざる裁き手を求めて

フランツ・カフカ『審判』初版1925年
／ オーソン・ウェルズ監督『審判』1963年

第三章 革命に敗れたひとびと

ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』1957年
／ デヴィッド・リーン監督『ドクトル・ジバゴ』1965年

第四章 東は東、西は西

E・M・フォースター『インドへの道』1924年
／ デヴィッド・リーン監督『インドへの道』1984年

第五章 空虚と狂騒の果てに

ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル『ゆらめく炎』1931年
／ ルイ・マル監督『鬼火』1963年

第六章 共和主義のために

アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』1940年
／ サム・ウッド監督『誰が為に鐘は鳴る』1943年

第七章 メコン河を遠く離れて

マルグリット・デュラス『愛人』1984年
／ ジャン＝ジャック・アノー監督『愛人 ラマン』1992年

第八章 不条理との遭遇

アルベール・カミュ『異邦人』1942年 / ルキノ・ヴィスコンティ監督『異邦人』1968年

第九章 平和の功罪

グレアム・グリーン『第三の男』1950年 / キャロル・リード監督『第三の男』1949年

第十章 国家管理と暴力の行方

アントニイ・バージェス『時計じかけのオレンジ』1962年
／ スタンリー・キューブリック監督『時計じかけのオレンジ』1971年

第十一章 永劫回帰と非回帰

ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』1984年
／ フィリップ・カウフマン監督『存在の耐えられない軽さ』1987年

第十二章 時代を映す薔薇

ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』1980年
／ ジャン＝ジャック・アノー監督『薔薇の名前』1986年

◆◆広報画像◆◆

▼画像 01 要クレジット：

菅野昭正『小説と映画の世紀』未来社 2021年



▼画像 02 展覧会キービジュアル

